O2-005

東日本大震災後に誕生した屋内遊び場PEP Kids Koriyama（ペップキッズこおりやま）の6年間の功績

菊池 信太郎[1,2]

[1]医療法人仁寿会 菊池記念こども保健医学研究所
[2]認定NPO法人　郡山ペップ子育てネットワーク

【趣旨】
東日本大震災同年の12月、福島県郡山市に東日本最大級の屋内遊び場が誕生し6年が経過した。その間約190万人の親子が来場した。長期の屋外活動制限による子どもの運動不足が懸念されたことが設置のきっかけとなったが、当初から子どもの成長発達に必要な遊びの質と量を担保することをコンセプトとしていた。福島県内には当施設を模倣した遊び場が林立したが、こうしたコンセプトのもとに遊具や専属スタッフ（プレイリーダー）を常駐させているところはほとんどない。今回、6年間の運営実績を報告するともに、子どもの育ちを支える遊び場の存在意義について考察する。

【方法】
1)6年間の利用状況、2）具体的な運営内容、3）子どもや利用者の反応、4）運営上の問題点について考察。

【結果】
1）累計利用人数　2月28日現在1,955,431人（市外からの利用が26%）、2)3つのカテゴリーがある。遊ぶ（アクティブ）：身体を使う遊具や細かい手作業を伴う遊び、砂場を設置し、子どもの粗大運動と微細運動の発達を促す。食べる（キッチン）：子ども自らが調理し、自作の料理を食することによって、食べることの大事さや食べ物に対する知識を得る。学ぶ（臨床心理士による子育て相談、英会話教室、ボディーマッサージなどのイベント）：子育ての不安を解消したり、英語に触れたり、親子の関係性を深めるイベント。3）身体遊びが日課になる、挨拶や片付けなどの社会性を習得、食べ物の好き嫌いが解消、子育ての不安が軽減したなど。4）無料のため運営は市の委託料と企業からの支援に依存。復興関連予算が削減されることに伴う将来性が不安視。プレイリーダーの確保と教育が課題で、専門資格としての格付けと見合う報酬確保が不可欠。社会の遊び場の重要性に対する理解が乏しい。

【考察】
いまだに30万人もの親子が遊びに来ることは、この施設のコンセプトが子どもや保護者のニーズに合致していることを証明している。今や子どもにとって地域のインフラと言っても過言ではない。外遊びの懸念から県内には多くの屋内遊び場が設置されたが、利用者の減少等で閉鎖されたところもある。子どもの発達には、幼少期にいかに良質の運動遊びをする機会を確保することが重要であり、全国的にもこうした遊び場は必要である。更に楽しく運動遊びをリードするプレイリーダーが不可欠であるが、いまだに社会的な認識が低く、プレイリーダーの育成体制と社会的基盤の整備が急がれる。

Presented by Medical*Online